

福島県浜通り地域で働く (=暮らす)、ということ。

浪江町出身 高橋 洋充

自己紹介

高橋洋充（たかはし ひろみつ）福島県立福島東高校 教諭（地歴・公民科）

- ・ 1971年（1 F 1号機稼働の年）生まれ。双葉郡浪江町出身。
- ・ 発災時は、福島市に居住していました。現在はときどき週末を浪江で過ごしています。
- ・ 父は避難するまで浪江で約半世紀にわたり食堂を営んでいました。
- ・ 今日お話しするのは、私が、父母（現在も福島市に避難中）や弟たち（富岡町と浪江町で働いているが、居住していない）、地元の友人（発災の翌年から帰還して家業を継続している）の話をきいて、自分なりに考えたことです。住民代表などでは決してないです。

今回、私が伝えたいこと。

- ①**創造的復興**の地では、帰還した住民のほか、多様な出自の新住民が新しいコミュニティを創ることになる。そのためには、地域の歴史・文化・伝統に対するリスペクトとエンパシーが重要なのではないか。
- ②原発事故で日常を奪われ、避難先で自らふるさとを「封印」したひとたちもいる。対話なき**創造的復興**による景観・コミュニティの変化は、ともすれば、ふるさとを「あきらめる」ことに繋がる危険性があるのではないか。
- ③**創造的復興**とは、帰還を選択できない元住民も、「ここは私のふるさとだ、先祖代々ここに住んでいたんだ、と誇りをもって語れる地域を創ることではないか。

- ①**創造的復興**の地では、帰還した住民と多様な出自の新住民が協働して、**新しいコミュニティ**を創ることになる。そのためには、地域の歴史・文化・伝統に対するリスペクトとエンパシーが重要なのではないか。

・ **新しいコミュニティ**の住民とは？

帰還した元住民・・・「先祖伝来の田畑を守りたい」

(帰還人)

「我が家で死にたい」お年寄りを中心。

→その他の年齢層はなぜ戻らない？

移住した新住民・・・公務員、廃炉関連・イノベ関連企業、浪江を心底好

きになって移住を決断した方々。でもなかには、

「補助金でチャレンジ」「被災地でキャリアアップ」

「復興予算にだけ用がある」ような人たちも??

→「金の切れ間が縁の切れ目」の人たちは、定着するのだろうか？

福島県浜通り地域は「復興予算の草刈場」ではないはず。
一方で、この地域が発災時より人口が増えることはないのは明らかである。

人口減と経済成長を両立させるためには「生産性」を高めるしかない。
この究極の「構造」が、原発事故（人災）をもたらしたのではなかったか。

創造的復興のゴールは、違う選択肢でなければならないのでは？

どういう選択肢があるのだろう。
どんな新しいコミュニティ(暮らし)を創れるのだろう？

私は、この地域の「昔ながらの暮らし」にヒントがあると考えました。

①**創造的復興**の地では、帰還した住民と多様な出自の新住民が協働して、新しいコミュニティを創ることになる。そのためには、**地域の歴史・文化・伝統に対するリスペクトとエンパシー**が重要なのではないか。

【問い】なぜ、「お年寄り」は帰還できるのだろうか？

【仮説】互いの顔がわかる規模の共同体（世間）で、

- ・「お金にだけによらない暮らし」
- ・「助けて、といえど誰かが手を差し伸べる」など、
支え合って生きるスキルを持っているから。

【根拠】（父母の背中をみて、そう思う。）

このような生き方を内包する、新しいコミュニティができないだろうか？

②原発事故で日常を奪われ、避難先で自らふるさとを「封印」したひとたちもいる。対話なき**創造的復興**による景観・コミュニティの変化は、ともしれば、ふるさとを「あきらめる」ことに繋がる危険性があるのではないか。

誰かのためによかれと思ってやっていることが、まったく違う作用をもたらすことがあることに気をつけたい。

広報なみえ 2021.7月号

<https://www.town.namie.fukushima.jp/uploaded/attachment/16682.pdf>



(3) 広報なみえ 2022.7.1

広報なみえ 2022.7.1 (2)

- ③**創造的復興**とは、帰還を選択できない元住民も、「ここは私のふるさとだ、先祖代々ここに住んでいたんだ、と**誇りをもって語れる地域**を創ることでないか。

ここに実際に見てこられた方がいらっしゃったら、お伺いしたいです。

このモデルが創造的復興のゴールのひとつであったら、**ここが「ふるさと」だと、誇りを持って語ることができそうですか？**

福島県HP <https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/57339.pdf>より



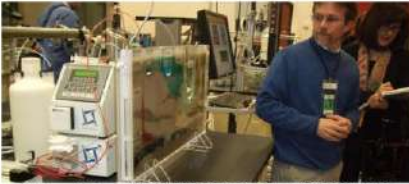
ハンフォード周辺の経済活動等視察

トリシティズ (Tri-cities) ・トライデック (Tridec) 太平洋北国立研究所 (PNNL)、ワシントン州立大学

- ①リッチランド市、バスコ市、ケニウィック市の3市、及び隣接する西リッチランド市、それぞれが属するベントン郡、フランクリン郡 (バスコ) からなる都市圏 (全米で6番目の人口増加率である。都市圏人口…2000年センサス19万人⇒2013年推計27万人)。
- ②ハンフォード・サイト内の浄化に7億ドルの発注がなされ、うち4億ドルが地元企業に (契約書に地元発注率の下限値が謳われる)。
- ③**トライデック**という、非営利の民間組織が、50年にわたり、地域の方向性を議論し、合意形成をはかり、企業誘致や産業振興を進めている (地域の様々な意見を一つにまとめて国にぶつける)



トライデックとの意見交換。地域の意見を一つにまとめる



PNNLハンフォードの浄化研究(ストロンチウム吸着手法に5年)



ワシントン州立大学…バイオマス燃料の研究(残渣から航空機燃料)

- ④トライデックは、浄化作業終了後(約50年後)を見据え、国にハンフォード・サイトを産業に活用できるように部分的返還を求め、5年かけ1999年に約6km² (600ha) の返還に合意。
- ⑤返還される土地についてコミュニティ内での議論を続け、**エネルギーパーク**とすることとした。
太陽光発電や電気バス、バイオ燃料に加え、直近5年間の議論の結果、**小型モジュール原子炉の生産拠点を**作ることを決定。
- ⑥『**地元経済のため**』に、元来核関連研究機関で、連邦エネルギー省所管の太平洋北国立研究所、ワシントン州立大学が地元企業等とも連携し、基礎研究から実用・製品化を目指している。
(バイオ技術を活用した航空機燃料など)
- ⑦PNNLの研究成果は**150以上のベンチャー**を創出。
さらに、理系の学生を増やす考えの下、独自に高校を設立。
- ⑧ワシントン州立大学では、PNNLと連携した**バイオマス燃料研究**はもちろん、**ワイン醸造学科**やハンフォードの歴史を次世代につなぐ取り組みなどを実施。

4

以上で、私の発表はおしまいです。
ありがとうございました。

もし、時間が残っていれば、オマケ資料をご覧ください。

昭和30年代
原発建設前



昭和50年代
原発建設後



平成
バブル崩壊後



2011年6月（3ヶ月後）



2017年ついに更地に。



求人への探し方について

STEP1



福島

求人ボックス
求人検索

「求人ボックス」機能を利用して、希望する地域・業種・職種・給与条件で検索し、気になる求人を探します。

QRコード、もしくはキャリア「求人ボックス」機能利用エリア内検索と併用！求人ボックス

STEP2



三宅町

求人ボックス
求人検索

「求人ボックス」機能を利用して、希望する地域・業種・職種・給与条件で検索し、気になる求人を探します。

QRコード、もしくはキャリア「求人ボックス」機能利用エリア内検索と併用！求人ボックス

STEP3



三宅町

求人ボックス
求人検索

「求人ボックス」機能を利用して、希望する地域・業種・職種・給与条件で検索し、気になる求人を探します。

QRコード、もしくはキャリア「求人ボックス」機能利用エリア内検索と併用！求人ボックス

QRコードから、気になる福島県東部エリアの求人情報をチェック
求人ボックス 活用エリア求人特集 <http://求人ボックス.com/活動地区-福島県>



面接までの応募お役立ち情報

01 面接までのスケジュール

- 1 応募先の電話予約
※面接日に要し
- 2 面接の日曜日
スケジュールに要し
- 3 面接当日の持ち物
※7時以降に面接、必要
なものを持ち参ります。

02 福島県4市町村・特定キャリア支援エリアの求人

「HOKK(フック)」とは、福島県東部エリアで働くことを志望した人たちの就職先を支援するウェブサイトです。



面接官が気になるポイント

結果から話すことを意識する

面接を終えてから話すことも伝える必要があり、話す順番としては「結果→理由→未来」の順が良いとされています。

企業研究をする

入社後の「業務」や「業務」は、事前に調べておくことが必要です。

10分前には到着しておく

会社には到着したものの、面接は10分前までに到着し、面接を受けることが重要です。

10分前には到着しておく

会社には到着したものの、面接は10分前までに到着し、面接を受けることが重要です。

經濟産業省委託事業 福島求人支援チーム応募事務局
 伊東建設公社 | 福島県人文館1-1 電話：0246-221111 10時～17時 休：日・祭 求職者無料

フィールドは、ふるさとから世界まで。  **FUTABA.**
FUTABA Inc. http://www.futabaku.co.jp


 地域未来牽引企業

第11回ふくしま学（楽）会

～福島で働くということ、事業を行うということ～

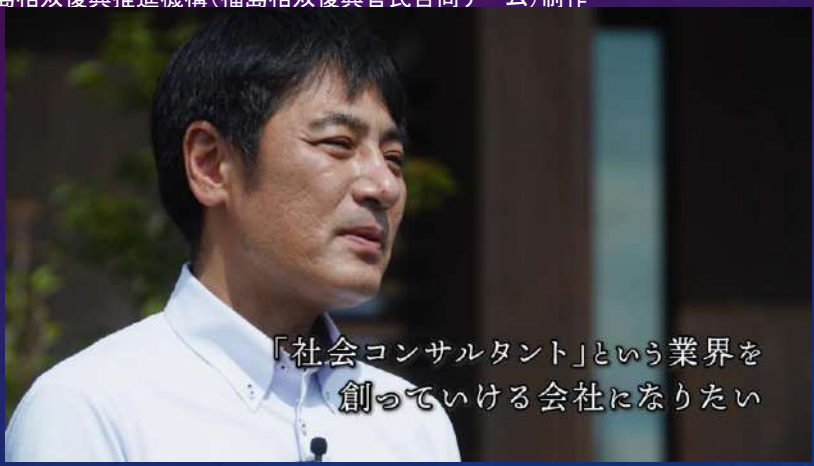
2023年1月28日

株式会社ふたば
株式会社ふたばラレス
 代表取締役社長 遠藤 秀文
 技術士（建設部門）・APECエンジニア
 早稲田大学招聘研究員



 **紹介映像**

公益社団法人
 福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム）制作



「社会コンサルタント」という業界を
 創っていける会社になりたい

 **FUTABA.**



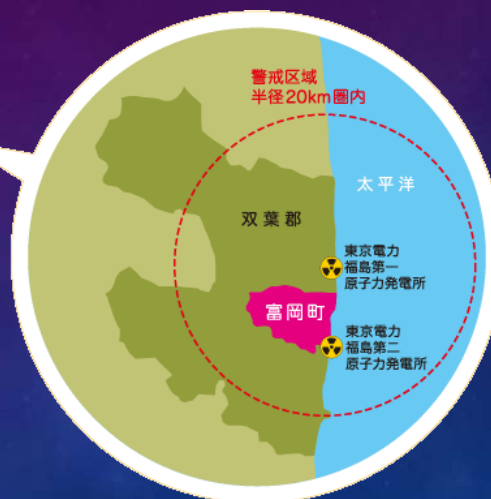
双葉郡に生まれ育ち、世界を見て、故郷に戻る

- 1971年に富岡町で生まれ、同年11月に(株)ふたばが誕生
- 大学進学のため上京
- 大手建設コンサルタントに入社、約13年間、国内外の空港、港、道路そして海岸・環境のプロジェクトに参画
- 2007年に帰郷、富岡町の(株)ふたばに専務取締役として入社

3



ふるさと双葉郡・富岡町



4





20歳の時、将来の決断

大学3年の時(20歳)、高校の親友と将来について語る

- 35歳までに故郷へ戻る、故郷を元気にするために…。
- 35歳まではとにかくできないことをやり尽くす。
- 世界を見て、広い視点で、魅力ある地域づくりを(恩返し)。

大学卒業後

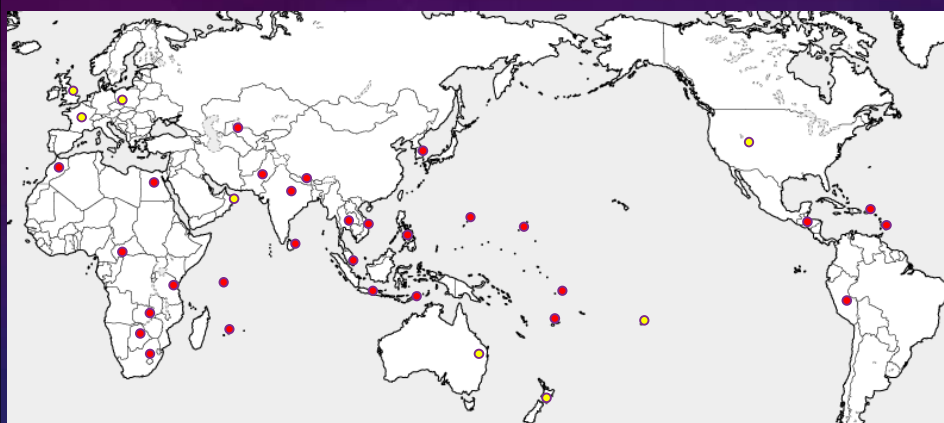
世界の発展途上国など100カ国以上開発支援する建設コンサルタント会社

日本工営(株)に入社

5



これまで経験した海外



- 仕事で行った国: 29カ国(日本工営23カ国、ふたば6カ国)
- 個人で行った国: 8カ国

6



フィールドは、ふるさとから世界まで。  **FUTABA.**
<https://www.futasoku.co.jp/>



ふたばの紹介

 **FUTABA.**



企業理念・社是

企業理念

広い視野、そして情熱と探求心を高め、
社会の元気エネルギーの礎を築くことに貢献する

社是

先義後利

人が守るべき道徳を一番に考えて、利益を二の次に考えること。
「義」は人としての道徳、仁義。
「利」は利益。

不易流行

いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れていくこと。
また、新味を求めて変化を重ねていく流行性こそが不易の本質であること。

 **FUTABA.**



ふたばの歩み

- 1971年 11月 創業・営業開始
- 1994年10月 双葉測量設計株式会社に組織変更
- 2009年 4月 (独)国際協力機構(JICA)法人登録
- 2011年 3月 東日本大震災・原発事故
- 2011年 4月 本社機能を郡山市に移し、営業再開
- 2013年12月 (株)ふたばに社名変更。
- 2017年 8月 富岡本社社屋 & 社宅、郡山支社社屋開
- 2021年 3月 ふたば交流センター「整の箱」開所
- 2021年 11月 創業50周年を迎える





郡山支社

富岡本社



Think Glocal

50th

2021年11月 創業50周年を迎える



フィールドは、ふるさとから世界まで。  **FUTABA.**
<https://www.futasoku.co.jp/>

 ふたばの事業概要

 **FUTABA.**

 ふたばのコンサルティングサービス

建設コンサルティング **用地・測量（2D・3D）**

地域デザイン（まちづくり） **空間情報コンサルティング**

海外コンサルティング **環境コンサルティング**



 **FUTABA.**

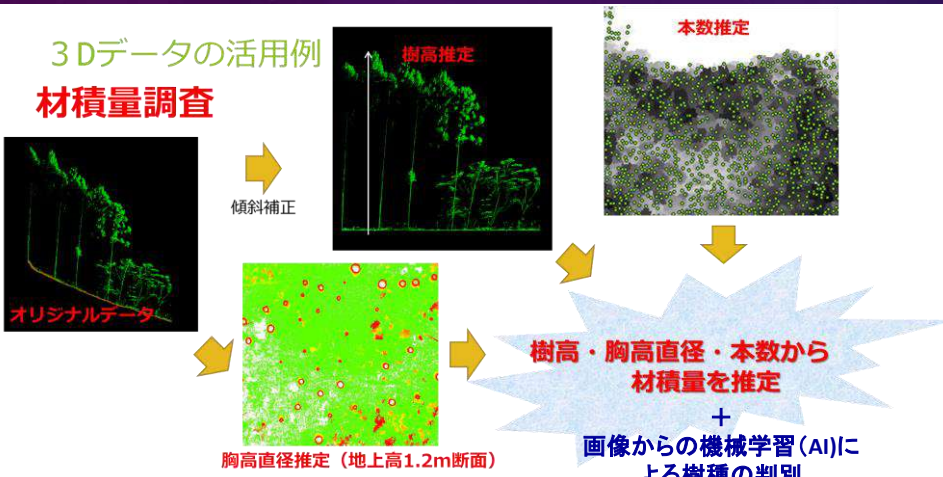
フィールドは、ふるさとから世界まで。  **FUTABA.**
<https://www.futasoku.co.jp/>

大学や研究機関との共同
研究及び論文発表




 ドローンとAI を活用した森林資源推定・予測システムの開発
 (2020、2021、2022年度 実用化開発補助金) 国立環境研究所、大阪大学との共同研究

3Dデータの活用例
材積量調査



オリジナルデータ → 傾斜補正 → 樹高推定 → 本数推定 → 樹高・胸高直径・本数から材積量を推定 + 画像からの機械学習(AI)による樹種の判別

胸高直径推定 (地上高1.2m断面)



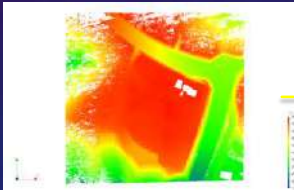


UAVによる空間放射線量調査 (2018、19年度実用化開発補助金) 日本: 工学部情報工学科 大山准教授との共同開発

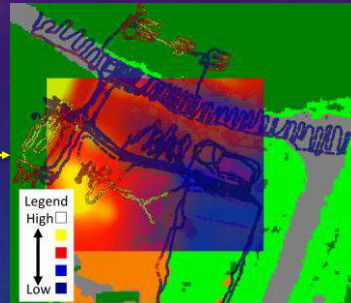
土地被覆画像



DEM画像



UAVに線量計を搭載して計測した空中の空間放射線量データに対して、土地被覆の状況や標高情報を考慮して解析することで、UAVにより地上1m換算値の空間放射線量を算出することができます。



ポイントデータ: 歩行データ

グラデーション面データ: UAVによる空中の空間放射線量データ



UAVによる獣害調査

東京大学生産技術研究所 沖教授、福島大学食農学類 牧准教授との調査

UAVに搭載した熱赤外カメラによる動物の個体数の調査により、同日に実施したライトセンサス調査と比較してより多くの個体を発見することができます。





レーザスキャナによる果樹の調査

東京大学生産技術研究所 沖教授、福島大学食農学類 高田先生らとの調査

3Dレーザスキャナにより計測した果樹の枝葉の三次元点群データと、トータルステーションにより計測した果実の位置を重ね合せて、果樹の位置に3Dモデルを設置することで果樹をリアルに再現している。落葉後にレーザ計測することでより正確な枝のデータを得ることができる。



フィールドは、ふるさとから世界まで。



FUTABA.

<https://www.futasoku.co.jp/>

福島での技術を世界へ



海外コンサルティング



① ツバル／沿岸災害対応のための環境派パイロットプロジェクト

② フィリピン／新ホール空港建設に係る持続可能型環境保全プロジェクト

③ フィリピン／重点海岸における気候変動対策としての海岸保全整備

④ モーリシャス／海岸保全・再生に関する能力向上プロジェクト

⑤ インドネシア／重点海岸における気候変動適応策としての海岸保全整備調査

⑥ マダガスカル／サンゴ礁の環境配慮ハンドブック作成作業

⑦ セーシェル／海岸浸食及び洪水対策にかかる能力向上プロジェクト準備調査(海岸浸食)

⑧ ペルー／マチュピチュ地区での3D測量技術による文化遺産の保全と活用のための基礎調査

FUTABA.

ツバル沿岸防災対策（JICA2013-2017）

ツバル沿岸防災対策



浸水

海岸侵食

越波

工事前

工事後

FUTABA.



インドネシア国海岸保全調査(JICA 2021年6月)



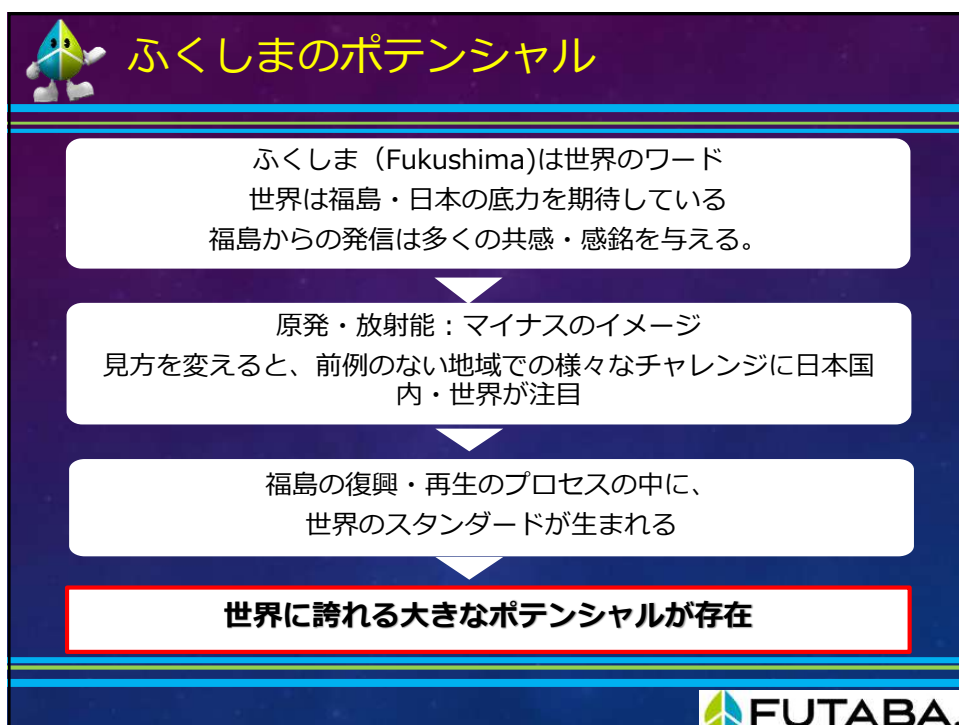
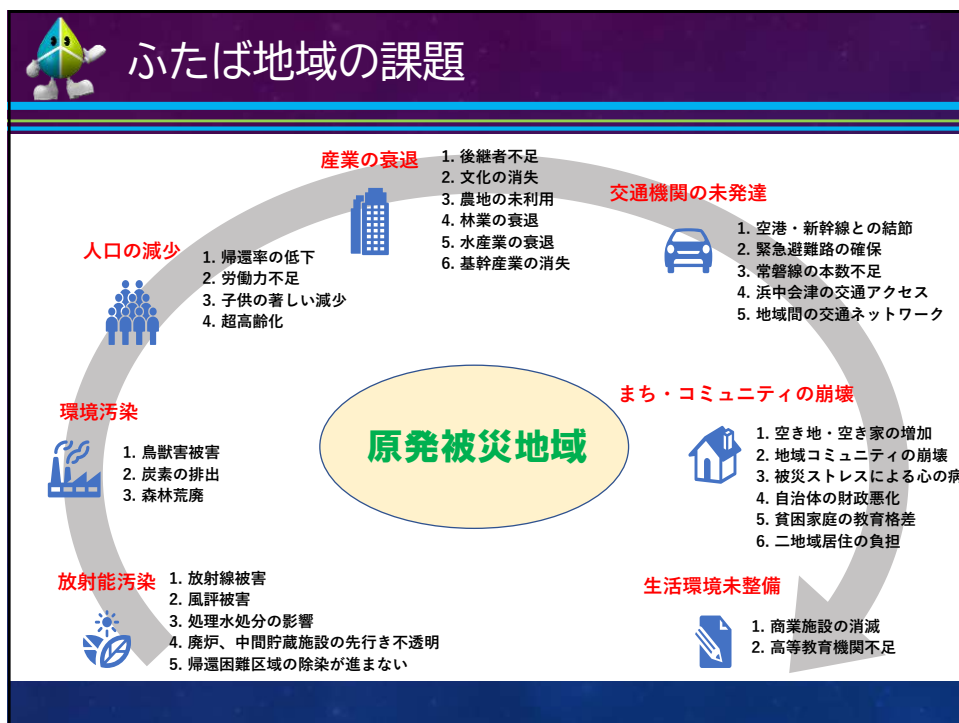
FUTABA.



マチュピチュ遺跡(ペルー国) JICA民間連携事業(基礎情報収集調査)2022年度



FUTABA.





ふたばとして目指すこと(社長の思い)

- 型や枠にとらわれない柔軟なコンサルティングサービス
- 浜通り地域そして福島県横断的な課題解決
- 多重災害地域の価値やポテンシャルの見える化と具現化
- 課題先進地域での地域再生と持続・発展可能なまちづくり



- 多重災害を経験した課題先進地域での実証、技術開発、対話、合意形成等の経験を踏まえ、日本の地方そして海外(特に途上国)の課題解決

⇒ 地域の価値創造、トランスサイエンスの実践、防災と地域の両立、学び・対話の場づくり、人財育成、等々



ふたばとして目指すこと

関係者の意見をもとに一足飛びに計画・設計をすると、様々な問題が発生



地域住民や関係者の課題意識・ニーズをヒアリング



ヒアリング結果には「思いこみ」も含まれるため、事実を見誤るリスクがある



バラバラな意見やデータを集めても、「真の課題(本質)」が見えにくい



地域課題の解決に向けて、モノやコトを計画・設計する



住民等との合意形成を疎かにすると、事業の停滞・中止に繋がりがかねない

まちづくりでは、「はかる」「みせる」、そして「つなぐ」というステップが重要



地域住民や関係者の課題意識・ニーズをヒアリング



データを収集して、地域課題を網羅的に客観的に知る



データを加工・分析して、課題の本質を考えやすくする



地域課題の解決に向けて、モノやコトを設計・計画する



様々な関係者との合意形成を通じて、事業を円滑化する





原発被災地域・富岡町で
ワインを通じた100年先の地域づくり

マイナスからの地域づくりに向けた
シーブリーズを感じるワイナリー・プロジェクト

一般社団法人とみおかワインドメーヌ

遠藤秀文 (代表理事)

名嘉陽一郎 (理事)

田中司郎 (理事)

大和田剛 (理事)

林秀樹 (理事)

高田大輔 (福島大生教授/理事)

写真: とみおかワインドメーヌのブドウ畑

30

なぜワインなのか？



富岡町の名所である夜の森の桜並木は約100年前に植えられたものですが、ワイナリーも100年事業と言われます。駅、海に近い立地で景観の美しいワイナリーを交流の拠点として整備し、未来の地域づくりを目指します。

富岡町の特長

- 先人が100年前に植えた夜の森桜が観光名所
- 白ワインとよく合う海産物(常盤もの)が名産
- ワインの名産地であるニュージーランドのオークランドと姉妹都市

ワインを通じた 100年先の 地域づくり

ワイナリーの可能性

- ブドウ畑の景観の美しさ
- 観光名所としてのワイナリー
- ブドウ栽培からワインの販売まで数年がかりの長期事業
(100年単位で考える事業)

富岡町の課題

- 観光資源が乏しい上に、夜の森桜の桜並木は未だに除染が完了せず
- 住民が10%程度しか戻らず、人口減少、超高齢化、コミュニティの崩壊等が深刻化
- 震災から10年経っても地域の復興・再生はスタートライン
(震災復興は長期戦)

31

活動内容



これまで



各地に避難する町民10名有志が集まって活動開始



太平洋を望む丘の上にブドウ畑を整備(小浜圃場)



避難解除1年前の2016年3月からブドウの試験栽培を開始



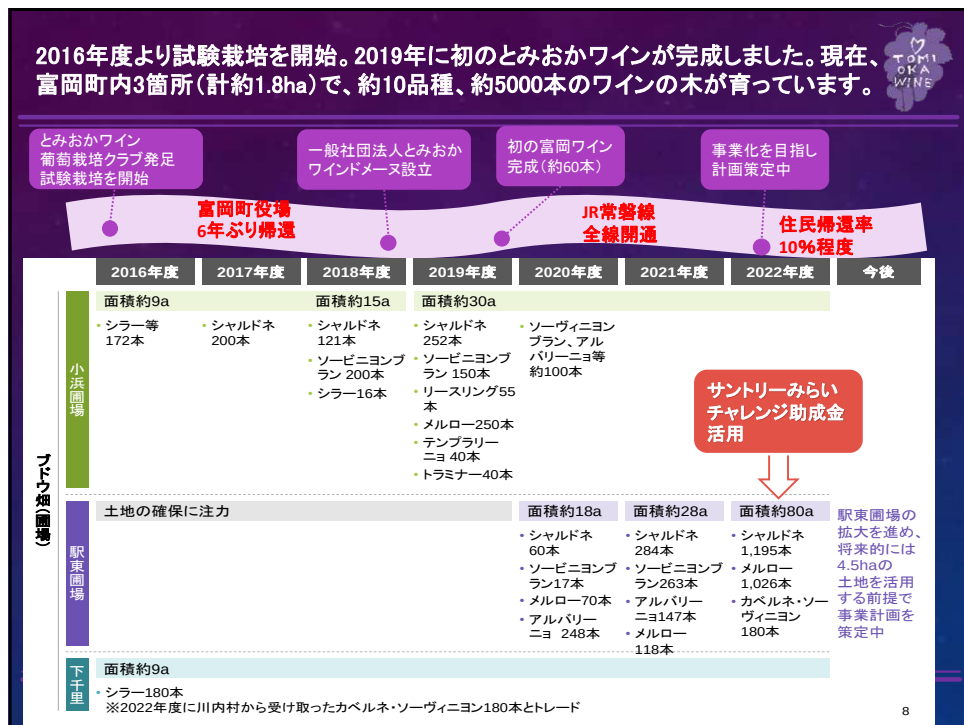
ブドウを植えて4年後の2019年にワインが完成(醸造は外部委託)

これから

- 東京駅から一本でアクセス可能な富岡駅前の土地(4.5ha)で本格的に事業展開を開始
- ブドウ畑だけでなく、醸造設備やワイン販売所も併設したワイナリーを整備予定



32



とみおかワイナリーの特徴

ワイナリーの特徴

復興のシンボル



- 第一・第二原発に挟まれた「復興の中心地」にあり、第二原発を近くで見ることができる
- 震災被害から立ち上がっていく「復興のシンボル」となることを目指す
- 津波に流されず残った蔵を活用

海風を感じられる



- 海から最も近いワイナリーの一つ
- ワインは富岡町のテロワールを生かし、ミネラル感のある味わい
- 浜風を浴び、海とブドウ畑を眺めつつ、ワインを味わうひとときを提供

公共交通機関とのアクセス



- 富岡駅から徒歩5分
- 東京駅から一本でアクセス可能
- ワインを飲んでから電車で帰れる

ワインの特徴

地元海産物とのマリアージュ



- 名産品である地元海産物(常磐もの)に合うようなワイン
- その他の地元産の食材との調和(マリアージュ)も目指す

つながりを大切にしたワイン



- 川内村など周辺ワイナリーとの連携
- 世界的なワイン産地であるニュージーランドの姉妹都市オークランドとのつながりを大切に、ニュージーランドの主要な栽培品種シャルドネ等を品種に採用

被災地でしか出会えないワイン



- 地域に根差したワインのため、主に富岡町近辺で手に入れることができる
- 相双地域を中心に福島県内の飲食店および通販でのみ購入が可能

沢山の方のサポート



これまで、地元住民、ボランティア団体、企業のCSRや地元の小中学生などに作業を手伝って頂いています。また、企業や被災者ツアー、公務員、学校関係者等の研修の場としても活用されています。



35

最近のワインの状況



36

株式会社ふたばラレス設立について

1. 設立日（会社設立の登記日）

2023年1月6日

⇒会社設立後、醸造所、販売所等の建設を行い、
2024年度（2024年8月予定）に富岡駅東地区に、
ワイナリーを設立する。

2. 資本金 4,500万円

3. 取締役

代表取締役：遠藤秀文、取締役：遠藤直美

“ラレス”とは

古代ローマの神話に語られている「家」や「地域」の守り神、“ラール”の複数表現。

ラールは片手に角杯（リュトン）を持って掲げ、乾杯か献酒をしているように見える。もう一方の手は低く構え、浅い献酒皿（パテラ）を持っている。

ワインが好きな神様で、地域や、家・家族を守り、繁栄をもたらすとの言い伝えから、新会社のイメージと合致している。



ふたばラレスの名刺裏面デザイン



DOMAINE
TOMIOKA

ドメーヌとみおか



株式会社ふたばラレスは、
「ドメーヌとみおか」事業を通じて、
地域の発展に貢献し、
豊かな未来を創造します。
物語の第2章の始まりにご期待ください。

FUTABA.
LARES



DOMAINE
TOMIOKA

株式会社ふたばラレスは、
「ドメーヌとみおか」事業を通じて、
地域の発展に貢献し、
豊かな未来を創造します。
物語の第2章の始まりにご期待ください。

【参考】ワイナリーの立地詳細

外観イメージ



駅東エリアを北側から望む(将来イメージ:VR使用)



41





【参考】景観（ワイナリー名称:ドメヌ・とみおか）

- 園場・蔵の正面・駅からの風景と、試飲エリアからの海や園場の景観を意識して設計。



【参考】景観

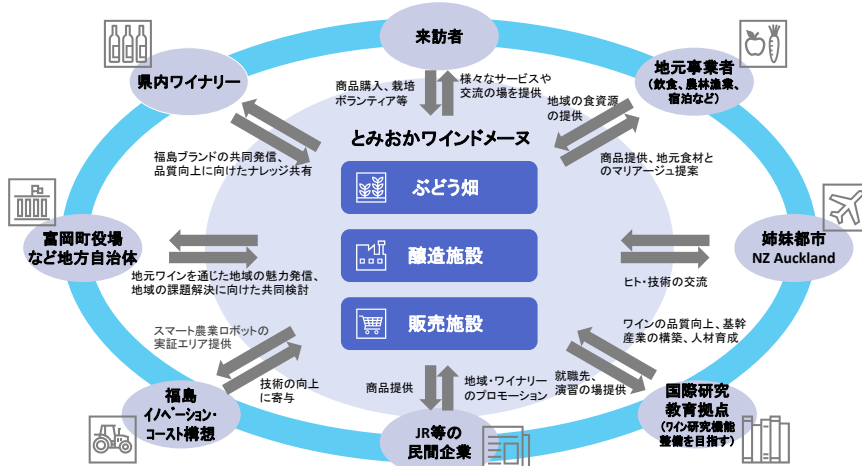
- ・ 圃場・蔵の正面・駅からの風景と、試飲エリアからの海や圃場の景観を意識して設計。



今後の展開イメージ



様々な人々との「つながり」を大切にして、この活動を地域の未来の基盤づくりそしてコミュニティの再構築に繋げていきたいと思っています。



解決したい課題とワインを通じて得られる主な効果



No.	解決したい課題	得られる効果
1	原発事故による急激な人口減少に伴う担い手不足	富岡駅前にワインの葡萄畑が広がることにより、町内外での関心が高まり、 <u>ボランティアなどの作業担い手</u> が期待される。また、将来ワインを核としたまちづくりが本格化し、 <u>移住定住に寄与</u> することも期待されます。
2	地域特産品の不足	将来ワインが生産されることにより、 <u>ワインを核とした地元食材とのマリアージュ</u> が実現し、 <u>地域特産品としての価値</u> が高まる。
3	地域コミュニティが崩壊	葡萄栽培の活動を通じて、 <u>町内外の人々の交流が深まり</u> 、新たな <u>コミュニティ形成</u> の可能性が高まる。
4	急激な超高齢化	帰還した住民の多くが高齢者であるが、多くはやりがいを見いだせていない。そのため、 <u>帰還した多くの高齢者</u> にも葡萄栽培に参加を促し、 <u>やりがいを見つけ健康増進</u> にも繋げる。
5	風評被害	原発被災を直接的に受けた地域でワインが完成し、 <u>安全かつ品質の良いワイン</u> を提供できれば、地域全体の <u>風評被害の払拭</u> に繋がる。
6	交流人口や観光人口の減少	葡萄の <u>栽培、醸造、各種イベント</u> を通じて <u>交流・観光人口の改善</u> が見込める。ワインを核とした海の幸、秋に遡る鮭、町内生産される農作物、日本酒などの <u>食、伝統行事等とコラボレーション</u> することによりその効果は増大する。

47

なぜ富岡駅東エリアにこだわるのか？



- ◆ 電車とのアクセス（駅直結が可能）。収穫祭等のイベント、ボランティア活動、被災地ツアー等の受け入れ
- ◆ ワイン（アルコール）を提供するイベント。公共交通機関による安心感そして大人数の移動。
- ◆ 車窓から景色となり、富岡町の顔そして将来のイメージ
- ◆ 海と川、スポーツ施設、アウトドア等との連携（面的な付加価値の創出）
- ◆ 平日の憩いの場、散策コースによる住みやすいまちづくり
- ◆ 地域の景観や観光拠点の創出。住んでみたいと思うまちづくり
- ◆ ワークेशन、リモートワークの環境創出
- ◆ その他、色々。

日本で最も駅そして海に近いワイナリーを目指します。

48

ふたばラレスへの思い（定款から）

当会社は、富岡町内での醸造用ブドウの栽培、そして醸造、販売、イベント等の運営を通じて、地域の新たな観光資源・産業の確立に加え、地域の交流人口拡大、地域間の交流促進、地域資源・地域コミュニティ間の結びつきを深める。また、富岡町を中心とした双葉郡の魅力および地域価値の向上に寄与すること、さらには地域の雇用促進や避難者の帰還促進及び他地域からの移住・定住を促進することを企図し設立する。ワインを核とした食のマリアージュ、文化の醸成によるテロワールを常に意識し、地域ブランドの底上げに寄与することを目的とする。また、当事業を通じて東日本大震災の歴史と未来を国内外に広く・永く伝承することに加え、100年先の地域づくりの礎そして希望となる物語を刻むことを目標とする。



福島で働くこと

株式会社ふたば 鈴木彩香

2023.1.29



目次

1. 自己紹介
2. 富岡町で就職したきっかけ
3. 働いてみて感じること・課題
4. 地域の未来・可能性





自己紹介

- ◆ 名前
鈴木 彩香
- ◆ 出身地
北海道 稚内市
(北海道の最北端に位置。人口3万人程度)
- ◆ 所属
株式会社ふたば
地域デザイン部 設計課
⇒道路等のインフラの設計、まちづくり業務等



 FUTABA.



富岡町で就職したきっかけ

- 地元を出て大学で学ぶ中で、地方のまちづくりに興味を持つ
- 大学3年生の夏休みに約1カ月の実践型インターンシップに取り組む。(富岡町のまちづくり会社「とみおかプラス」)
- インターンの経験から、富岡町で就職したいと感じるよう。
- 大学で学んだ設計とまちづくりの両方が活かせる、「株式会社ふたば」に就職

 FUTABA.



地方のまちづくりへの興味

- 地方出身で、子供の頃から、過疎化していく地方の地域を目の当たりに。
 - 大学で、建築や都市計画、まちづくりについて学ぶ中で、地方のまちづくりに興味を持つ。
- ↓
- 一般的な「職業体験」のインターンではなく、まちづくりを実践できる「実践型インターンシップ」に参加



実践型インターンシップ

- 「関係・交流人口の拡大」をテーマとした、「復興ツアーの企画・提案」に取り組む
- ↓
- プログラムの中で、地域の様々な人と関わる機会
 - プログラムが終わってからも、富岡町に足を運び、お世話になった人と関わる機会
- ↓
- 富岡町に対して、「地元」のような感覚をもつように…
- ↓
- 大学卒業後、就職先として、株式会社ふたばを選択





働いてみて感じること・課題

- 富岡のまちづくりを真剣に考えている人が多い
 - その反面、町内で「にぎわい」を感じる機会が少ない
- ↓
- 町の人が集まってる場所が少ない？
 - 子供がにぎやかに遊んでいる気配、楽し気な雰囲気を感じられる場が少ない？
- ↓
- 今後は「設備を復旧する」だけではなく、「にぎわいを創出する」のための取り組みが必要



地域の未来・可能性

- 町内には、様々なポテンシャルのある場所が存在
(海(漁港・砂浜)、桜並木、ワイン用葡萄園場、富岡川のやな場 etc...)
- ↓
- これらを上手く活用することで「にぎわい」を創出
 - それぞれを連携させて、新たな魅力・人が集まる場を作り出すことが必要





地域の未来・可能性

- 双葉郡は原発事故の影響で、人口減少・少子高齢化が著しい状態に陥っている。



- 日本の地方都市の、数十年後の姿？
- この地域での「まちづくり」が、日本各地の地方都市のモデルケースになり得る



- この地域のまちづくりは、丁寧かつ革新的なことを実行する必要がある



一般社団法人とみおかワインドメーヌ
統括リーダー 細川 順一郎

自己紹介



細川 順一郎 自己紹介



●経歴

- ・1972年5月：静岡県浜松市生まれ
- ・大学卒業後：地元浜松のIT関連会社に就職、オーディオ用LSI設計に携わる
- ・2004年9月：友人にスカウトされ、大好きなワイン業界へ
～ワインショップ責任者、ワインバー&レストラン責任者、ECサイト運営責任者などを歴任
～日本ソムリエ協会認定ソムリエ資格取得
- ・2009年8月：ワインが好き過ぎて、ワイン造りを学びたくなり正社員→パートタイムへ
～週の半分は山梨県甲州市のワイナリーで研修開始
- ・2010年4月：本格的にワイン造りを学ぶため山梨県甲州市へ家族3人で移住
～ワイナリーでブドウ栽培からワイン醸造、販売まで全てに関わる
- ・2021年8月：山梨県甲州市のワイナリー退職⇒自分のワイナリー設立へ？！
～友人の紹介でとみおかワインドメーヌ遠藤代表と奇跡の遭遇！
～2021年8月富岡町初訪問、ワイン用ブドウ栽培地としてのポテンシャルに着眼
- ・2022年1月：富岡町へ移住、富岡町地域おこし協力隊としてとみおかワインドメーヌに着任
～統括リーダーとしてワイン用ブドウ栽培・ワイン醸造に励む
- ・2023年1月：2024年夏のワイナリー竣工を目指し1月6日『株式会社ふたばラレス』ローンチ
～JR富岡駅徒歩2分の駅東園地を拡大し自社園地面積が合計4.8ha(48,000㎡)へ！
～2025年春には100%富岡町産ワインをリリース予定

趣味：ワインを造ること、ワインを飲むこと、ワインの勉強をすること

富岡町へ移住したきっかけ



- 2019年、とある決意をする。約12年務めた山梨県甲州市のワイナリーを2021年8月末で退職し自分のワイナリーを立ち上げるぞ！！
- 2021年6月、友人のワイナリーに遊びに行った際に独立する話をしたところ、すぐにあるメールが転送されてきた。福島県富岡町でワインの専門家を探している、と。
- 富岡町？福島県のどこにあるの？
- 実は、東日本大震災そして原発事故の事なんて記憶から消え始めていた。
- たまたま偶然、福島県会津地方に行く用事があり、どうせ福島に行くなら富岡町にも寄ってみようと思い軽い気持ちで初訪問。2021年8月、とみおかワインドメーヌ遠藤代表と初めてお会いする。
- 高台の上に広がる太平洋が一望できるブドウ畑に感動し、そして同時に2F(福島第二原発)の排気塔もその景色の中に収められているのを見て絶句。
- この地域を自分の目で見て知り、肌で感じ、そしてこの地域で未曾有のチャレンジをしようとしている遠藤代表と出会い、ワインというフィルターを通してこの富岡町と人の心を豊かにしたいという想いに共感する。
- 心の広い妻の後押しもあり、縁もゆかりも無い富岡町への移住と誰もやったことのない壮大なプロジェクトのお手伝いをする事を決意。現在に至る。

富岡町へ移住して感じたこと・課題



良い点

- ☆ 高い建物が無くて、いつでも星がきれい
- ☆ 夜の森の桜並木がきれい
- ☆ 毎日、好きなブドウ畑と海が見られて幸せ
- ☆ シーブリーズが心地よい (たまーに暴風)
- ☆ 夏涼しく冬暖かくて快適 (実は超寒がり)
- ☆ 人が少なくて静かな街
- ☆ とりあえず最低限の生活が出来る環境は整っている
- ☆ 富岡町ネイティブはディープな人が多い (遠藤代表含む)



悪い点

- ▲ 観光産業が限定的過ぎて通年で遊べる場所が無い
- ▲ 人が少なすぎてスーパーが19時には閉まる
- ▲ 一番近いコンビニも21時で閉まる
- ▲ なので夜遅くに買い物が出来ない (飲み足りない時のお酒等)
- ▲ クリーニング屋さんが無い
- ▲ 病院が少ない
- ▲ 行政が移住定住に対して消極的
- ▲ 人が少なすぎて人間関係のネットワークづくりが大変



この地域の未来・可能性



100年後の富岡町をみんなで創造しよう！

様々な課題が山積する富岡町ですが、夜の森の桜並木のように、とみおかワインを通して100年先の賑わいを創出する取り組みなんて、普通は経験出来ないことです。

私は、ワインによって自分の人生が大きく変わった経験を持っています。ワインの可能性は無限大だと信じています。

この富岡町で、ワインという新たな文化の醸成を目指して頑張っていきます！！



なぜ海洋放出に 反対運動が起きるのか

創造的未来を考える

ふたば未来学園 2年 佐藤志保

海洋放出に興味を持ったきっかけ

1年生の時に国際高校生放射線防護ワークショップに参加した

→特に海洋放出に興味を持つ

東電の方の「海洋放出は科学的に問題がない」

という説明に驚いた

「海洋放出=安全なこと」と思うようになる

なぜ反対運動に焦点を当てたのか

ワークショップの成果発表で反対運動をする団体に触れた

→彼らの考えを理解するのが難しく

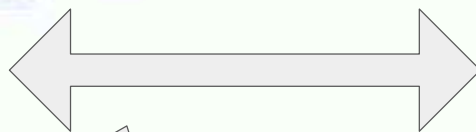
「なぜ海洋放出に反対するのか」

と、考えるようになる

- ・運動を起こしてまで訴えたいこととは？
- ・海洋放出にはどんな問題があるのか

なぜ海洋放出は受け入れられにくいのか

国



国民

情報の認識度の違い
決定権の有無

- 手元にある情報が少ないため他と比較して信頼性を確かめることが難しい
- メディアの主張にのせられやすい
- 過去の事例に対する国への不信任感が今も根強く残っている

国と国民の差が大きい状態

反対したい理由とは

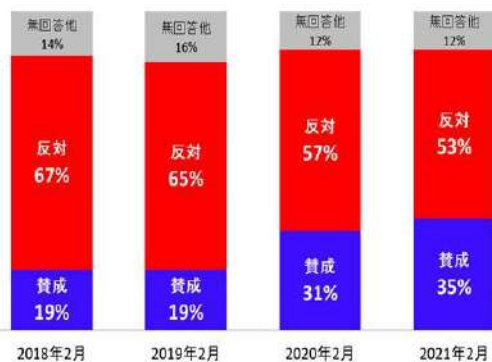
- トリチウムが及ぼす人体への影響が怖い
- どれだけ濃度を薄めても流す量は変わらない
- もっと安全な方法をとって欲しい
- 「よくわからないけど怖い」と感じている人が多い
- 福島県をはじめとした被災地に対して、また風評被害が起こるかもしれない
- 東電が何かミスをするんじゃないかという不安がある
- これで廃炉、復興が前進するのかわからない

環境・人体への悪影響、不十分な情報、風評被害への懸念
東電・国への不信感、先が見えない不安

などが反対する理由となっている

海洋放出における展開

(グラフ2) 朝日新聞世論調査
処理水放出 賛成／反対



※RDD方式。対象は(一部地域を除く)福島県内有権者。有効回答998～1,049人。

賛成派の増加

2019年から2020年にかけて賛成派の割合が増加している

増加の原因と思われるもの

海洋放出について知るための公聴会、座談会、東電による1F視察などの広報活動

「正しい知識」

1F地域塾の同グループの一人

「自分の周りで賛成派が増えていると感じる。そのなかで、賛成派が反対派を『正しい知識を持っていない人』と見なすという問題があるようだ。」

→自分が当初この考えを持っていたことに気づく

賛成派による反対派への攻撃が起こる可能性

は十分にあると実感した

考えられる例



賛成派

正しい知識を身に
付けろ！！

→SNSなどでの誹謗中傷



反対派

反対派の声が圧殺されていく

海洋放出に対して思うこと

自分にとって海洋放出は妥協案

まだ、海洋放出に対する不安が多く、このままでは風評被害が出る懸念がある。しかし、先送りにしたり、別の方法を取ろうとすると、また新たに予算が必要になる。



その結果、増税されて生活が苦しくなるのが怖い。

社会全体を考えると反対の気持ちもあるが、
自分の生活と繋げて考えると賛成せざるを得ない

問題に直面する人たちに必要な意識

- 海洋放出に関心を持つ
- 「知らないから不安」な状態から抜け出す
- メリットとデメリットを理解し、比較する
- 他人に責任を負わせない

例) 海洋放出後に何らかの事故があったとき
反対運動をしていた団体に対して
「何であの時もっと頑張らなかったんだ」と責めることをしない

私が目指したい未来

自分の住む地域を好きでいれる社会

そのためにすべきこと

地域の問題に真剣に向き合う

物事の正しさは後にならないとわからない
今、適切だと思うことを行っていくしかない

参考文献

情報検証研究所のブログ

【検証:海洋放出に対する世論の変化】～「世論調査」はやり方次第で「世論操作」に～

<https://johokensho.hatenablog.com/entry/2021/05/14/151422> 参照日(2023/1/24)

【プロフィール】

木村 紀夫 (きむら のりお)



team 汐笑(ゆうしょう)プロジェクト代表・大熊未来塾塾長

1965年福島県大熊町の海沿いの熊川部落に生まれる。自転車で放浪生活をしつつ自給自足的な生活に憧れた20代を経て、帰郷し結婚、娘2人を授かる。

45歳で東日本大震災により被災。津波で父と妻、次女を失い、

原発事故で故郷を追われる。父と妻の遺体は見つかるが次女：汐風(ゆうな)の遺骨の一部発見までに5年9か月を要する。捜索の傍ら、避難先の長野県白馬にて便利な物に頼らない生き方を追求し、震災の伝承だけでなくこれからの生き方に疑問を投げかけるようなイベントを開催。

現在は福島県いわき市に拠点を移し、中間貯蔵施設内の大熊の自宅跡に通い発信をつづけ、自身の得た教訓を次世代に絶やさない未来を町で実現するために日々奔走している。



【大熊未来塾とは？】

目的：大熊町での震災経験の伝承

設立：2020年4月

法人化：2020年8月25日一般社団法人とする

あえて登記住所は大熊町の代表木村自宅跡

目標：1000年後の災害でも命を守る

1000年後の先へ営みの持続

伝承活動1：大熊町を案内しながらの語り部活動

伝承活動2：依頼先へ出向いての講演、講話

伝承活動3：オンラインを使って大熊町から

伝承活動4：機関紙「SoIL311」の発行

(文字を使った伝承)

伝承活動5：原子力災害考証館での遺品展示

(写真展、企画展などの開催)

社会的問題を抱える他地域への視察も

大熊町で本当に持続可能な未来を考える！



木全 洋一郎
(きまた よういちろう)

プロフィール

- 学生時代: 農村開発NGOでボランティア
- JICA札幌←JICA入職:
曲がり角の北海道開発—技術移転から経験交流へ
- タイ事務所・タンザニア事務所:
地方行政分野プロジェクト・援助協調
タイ・タンザニアと日本の地域を結ぶ地域間協力・交流
- JICA本部:
途上国のガバナンス・地方行政支援
日本の地方創生の現在進行形の事例・リソースの発掘
- 陸前高田市役所出向(2019.4~2022.3):
“ポスト復興”のまちづくり/産業の活性化
- JICA北海道(帯広)代表(2022.4~):
道東の地域資源を生かした国際協力と地方創生へ



陸前高田の復興まちづくりに関わった教訓①

“よそ者”の役割は地域に**新しい風を吹き込む**こと？

“よそ者”の発想・ネットワーク・行動力
×
地域が大切にする価値、文化、資源、関係性



地域の新たな可能性
↑
敢えて“**変わらない**”を創る

陸前高田の復興まちづくりに関わった教訓②

地方創生は地域の課題解決？

地域の課題→課題解決のためのプロジェクト(支援)



現場が持つ価値・可能性(夢)→価値への共感、創造に向けた協働

陸前高田の復興まちづくりに関わった教訓③

事業の形成は「目的」が大事？

問題分析→目的を前提にした事業形成



人のコミット・信頼を前提にした事業形成

若い人に残ってもらう地域づくり？

ウチに残ってもらう(=ソトに出さない?)地域づくり



ウチに帰ってこれる／受け入れられる地域づくり
→出ていく前に何を見せられるか？

島田 剛（しまだ ごう）



明治大学 情報コミュニケーション学部 准教授(国際経済学)

専門: 産業政策、震災復興、ソーシャル・キャピタル
1992-2015 国際協力機構(JICA): 産業貿易課長、理事
長室秘書役(緒方貞子理事長、大島賢三副理事長担当)など

2005-2007 国連日本政府代表部 (NY)一等書記官
2015-2018 静岡県立大学 国際関係学部 准教授
2018年より現職
(この間、コロンビア大学 客員研究員、アジア開発銀行
コンサルタント、EU (European Union) コンサルタントなど)

学位: 博士(早稲田大学、学術)、修士(マンチェスター
大学、開発経済学)。

著書: 「ミクロ経済学への招待」(新世社、2月下旬発売
予定) など

2023年1月29日（日）
第11回ふくしま学（楽）会

パネル「創造的復興とは何か？ ：福島浜通りで働くということ」 コメント

国立研究開発法人 国立環境研究所
福島地域協働研究拠点
辻岳史（Takashi Tsuji）
Email：tsuji.takashi@nies.go.jp



国立環境研究所・福島地域協働研究拠点

福島県環境創造センター（福島県三春町）

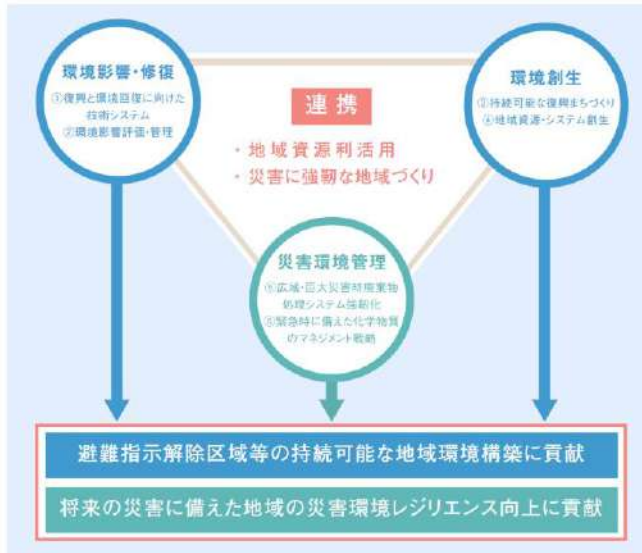


- ・ 2016年に国立環境研究所の現地研究拠点として福島支部を開設
- ・ 福島県、日本原子力研究開発機構などと協力して、調査研究を実施中

福島地域協働研究拠点の研究



環境中の放射性物質の動き、生態系への影響は？



環境に配慮した復興まちづくりを進めるためには？



環境・安全・安心面から将来の災害に備えるためには？

・ **災害環境研究**：放射性物質に汚染された廃棄物の管理・処理、環境中の放射性物質の動き・生物生態系への影響、環境に配慮した復興まちづくり、将来の災害に備えるためのシステム・マネジメントの研究を推進

自己紹介

- ・ 愛知県名古屋市出身、1984年生まれ（38歳）
- ・ 2011年4月に名古屋大学大学院環境学研究科・社会学講座博士前期課程に入学
- ・ 専門は地域社会学。**地域コミュニティにおける住民と自治体の協働・コミュニケーション、住民参加**に着目
- ・ 2012年3月から宮城県内の津波被災地域（女川町・東松島市・名取市）にて、復興まちづくりの事例研究を実施
- ・ 2017年4月から国立環境研究所福島拠点に勤務、三春町に在住
- ・ 福島県内自治体の復興政策・環境政策における住民参加に関する研究を実施



福島原発事故前後の大熊町と双葉町における住民参加に関する調査研究

振興計画審議会

百人委員会からのアイデアと提案が町づくりに生かされています。

本格的な計画づくりを行うため、双葉町振興計画審議会が発足し、町議会・学識経験者、一般町民代表、関係団体職員・町職員の中から18名の方々に委嘱され、『クリエイティブ双葉・百人委員会』とともに実施計画づくりに向けてスタートしています。



100人のクリエイターたち

クリエイティブ双葉 百人委員会

来るべき町の復興計画を具現化するため、町民一人ひとりが町づくりに参加し、町民の声を町づくりに生かす。町民の声を町づくりに生かす。町民の声を町づくりに生かす。



✓ とともに福島第一原発の立地自治体であり、同じく甚大な原発事故の被害を経験した大熊町・双葉町において、原発事故後の復興過程における住民参加の進め方には違いがみられる

➤ 大熊町・双葉町の住民参加の違いについて、**原発事故前の町政における住民参加、事故後の復興計画策定における住民参加**に着目して調査・研究中

出典：双葉町役場企画開発課（1988）『ふたば町勢要覧'88』p58-59.

5

1つ目のコメント

■ 福島浜通りで働く人の「伴走者」としての地方自治体（市町村）行政の役割はいかにあるべきか？

- ✓ 原発事故前の浜通りの市町村行政は、発電所（火力・原発）に由来する財源を活用して、公共施設・公共インフラの整備を進めて雇用を創出してきた。同時に、補助金・交付金を拠出して、地場産業（農業・商業など）の担い手の事業運営を支援してきた
- ✓ 原発事故後も、大熊町・双葉町をはじめとして、浜通りの市町村は他地域に比べると安定した財政基盤を有する。市町村行政として、産業振興に費やすことのできる財源には恵まれていると思われる
- ✓ 他方で、原発事故前の浜通りにおける建設業、電気・ガス・水道事業などの原発関連産業から構成されるモノカルチャー型の地域経済構造は、事故後に変容しつつある。このような状況下で、浜通りの市町村行政は「伴走者」として、福島浜通りで働く人をいかに支援しうるか？より踏み込めば、**公共施設・公共インフラの整備、補助金・交付金を拠出という事故前の産業振興、産業の担い手支援の方法とは異なる、事故後の産業の担い手（移住者をはじめとして）の特性を考慮した支援を展開しうるのか？**

6

2つ目のコメント

- 福島浜通りで働く人々の「人間関係のネットワークづくり」
（細川さん）はいかに進められるのか？
- ✓ 原発事故前に浜通りで働く人々にとっての人間関係の基盤となっていた商工会・行政区などの従前の地域団体も、活動を再開している
- ✓ 他方で、原発事故後に設立・創出されたまちづくり団体、